
思春期だから

市河りゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思春期だから

【Nコード】

N8608B

【作者名】

市河りゅう

【あらすじ】

鞆の中には親友が渡してきた、人には見せられない紙袋。でも今日は幼なじみの女の子と勉強することになっていて…

(前書き)

ジャンルが自分の中でよく分からないものになったのですが、最初に恋愛っぽい物を書こうと思ったのでこちらにお邪魔しています。

今日は朝からいい天気だった。あることを除けば何事も無い一日だった。

そのあることのおかげで僕はとても緊張する羽目に陥った。

ことの起こりは昨日にさかのぼる。

昨日、雑談をしている時に何故か思春期特有の話題になった。何故かだなんて思春期だからとしかいいようが無いと思うけど。

そこで僕だけが持っていないことが判明した。

中学一年になって三ヶ月、他の面々がどうかなんてことは分からないけれど、少なくとも僕の友人関係は全員持っているとのことだった。

何をと思っている人がいるかもしれない。十八歳未満はお断りの出版物。要するにエロ本のことだ。

そして今日、長年の親友に紙袋を手渡された。

彼なりの優しさなのだろう。しかし、よりにもよって今日じゃなくともいいではないかと思う。

話は変わるけど、僕には幼なじみの女の子がいる。一つ年上でお隣さん、同じ中学に通う世話焼きな女の子だ。

ここで重要なのは《世話焼き》の部分、そして、僕が彼女を好きだということ。

また話が変わって申し訳ないけれど、以前中間テストがあった。

僕はその中学最初のテストでものすごく悪い点数を採った。

それを知った幼なじみは《世話焼き》を発揮し教えてくれることになった。

木曜日と土曜日。

そして今日は木曜日。

このことを知ってるのは当人と家族ぐらい。少なくとも僕は親友にすら話してない。だから彼に悪意があるわけでないことは承知し

ている。

それでも、今日でなくともいいではないかと思うのは仕方のないことだと思う。

早く終われ早く終われ早く終われ……

帰りの号令を級長が言い終わるのと同時に鞆を手に取りダッシュ。親友の呼ぶ声が聞こえた気もしたが意識から排除。

今日は教師の話がいつもより長かった気がする。時計を見る限りではいつもとあまり変わってなかったのが信じられない。

いつもの通学路をこれまでにない速度で走り抜ける。自分にこんな力があつたなんて、もっと別の機会に知りたかったと思うけど。

そうこう考えてるうちに自宅に到着。

鍵は………閉まっている！

彼女は僕の家の鍵を持っており、僕より先に終わったときは遠慮なく家の中に入るようにしている。

——間に合った。

自然に安堵のため息がこぼれる。好きな人に発見されてしまうと、いう最悪の事態を回避……

「あ、お帰りなさい、みい君」

ゆっくりと振り向くと水色のワンピースに白いカーディガンを着たお隣さんがいた。

「ゆ、ゆう姉さん!？」

「今日先生が出張でかなり早く終わったの」

長いストレートの黒髪が似合う姉さんは笑いながら言った。

——まだ大丈夫まだ大丈夫。前向きに考えろ、隠している最中にやって来られるよりマシじゃないか。そうだ、鞆の中なんてそうそう見られるもんじゃない。冷静になれ、よっぽどのミスでもない限り大丈夫だ——

「ねえ、大丈夫？」

「大丈夫、まだ大丈夫だよ!？」

「えっと……調子悪いなら今日の勉強はやめにしようかと思っただけど、大丈夫ならいいよね」

ああ、その優しさが今は憎い……

今は僕の部屋で勉強をしている。

不自然にならぬよう最大限の注意を払いながら鞆から教科書ふでばこノートを取り出して鞆を閉めて一時間半。いつになく緊張した時間を過ごしている。

目の前でゆう姉さんがため息をついた。

「今日はもうやめにしようか」

「え、なんで？いつもなら後三十分ぐらいやるのに」
そうしてくれると嬉しいけれど。

「今日のみい君なんか変だから、体調とか気を付けないとダメなの。少し早く終わって休まなきゃ」

うう、じくじくと罪悪感が……

そんなこと知らない彼女は机の上を片付けて部屋を出ていった。

「おとなしくしててね」

「うん、分かったよ……」

ごめんなさい姉さん……

姉さんが出ていくと僕は机に向かって倒れ込んだ。出しっぱなしのシャーペンが床から落ちた。

三分ぐらいそのまましているとだんだん落ち着いてきた。落ち着いてくると僕は鞆の中身が気になってきた。

みんな見てるんだから、僕が見たって何も問題ないのであって、何も悪い事をしている訳ではないから。

誰にしているのか分からない言い訳を心の中で呟きながら鞆に手を伸ばし、紙袋を取り出して中身を取り出す――

コンコン

「みい君、今家から体温計持って、きたか、ら……………」

……ノックしてもすぐに開けたら意味ないと思います。

硬直した僕と、その手元にある紙袋から半分でている物を見つめる姉さん。

数秒の硬直の後、姉さんは顔を赤らめながらも、僕から紙袋を取り上げ床に置き、さっきまで勉強していたテーブルを横にどかしてその場に座って自分の目の前の床を叩く。そこに座れということだろう、僕はそれにおとなしく従い正座した。

「……みい君も、男の子だから……こういう、物に興味があるのは仕方がないって、思うけど、こういうのは大人になってからで、具体的に言う十八歳になってからじゃないと、ダメだから……………」
顔を赤らめてうつむいたまま、時々つかえながら姉さんは続ける。

そんな姿に僕は罪悪感を感じながらも、可愛いなあ、とかそんなことを思っ、そんな自分に自己嫌悪したりしてた。

「……………」という訳で分かった？」

「は、はい！」

やばい聞いてなかった。

「じゃあこれはわたしが没収して処分しておくから」

「え！？待って、それは借りたやつだから処分するのは」

「友達のせいにするのはダメ」

「本当だって！」

「……でも借りたのはみい君だからやっぱりダメ」

「うー、でもそこまですることはないと思うんだ。処分なんかしたら友達も怒ると思うしゆう姉さんだって自分が貸した物を処分されたらいやでしょ？だからちゃんと明日返してくるからっ！」

一息で言いきる。

「……でもダメ」

「なんで！？」

ここまですってダメなのか！？神は我を見捨てたのか！？まあ、

姉さんが戻ってきた時点で見捨てられている気がしないでもないけど。

「…………ダメなの」

——！？泣いている！？

「ど、どうしたの？どこか痛いの！？え？なんで？」

そこで姉さんは顔をあげた。瞳は涙で濡れていた。

「みい君のことが好きだから」

え？

「みい君のことが好きだから、そういうのは見て欲しくないの……」

「……………」

「……………」

えっと、これはどういうことで？？

「……………」

「……………」

長い沈黙。

耐えきれなくなったのは未だ混乱中の僕ではなくて姉さんだった。

「…みい君はわたしのこと好き？」

「うん、好きだよ」

それは間違えようのない簡単な、混乱中の頭でもすぐに答えられる問いかけ。

「僕もゆう姉さんのことが好きだよ」

僕が言葉を言い終わるのと同時にゆう姉さんは僕の胸に抱きつい

てきた。

告白のきっかけとしては最悪の部類に入ると思う。

だけど過程はどうあれ僕は、僕たちは幸せを感じていた。

ちなみに紙袋は結局処分された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8608b/>

思春期だから

2010年10月8日14時59分発行